

ネリー・オマール

—人生を2倍に生き抜く—

(Tanguendo en Japon No.18(2006) 掲載原稿の訂正版、訂正箇所を下線で示す)

齋藤富士郎

1. 価値ある1曲

2005年にSONY&BMGからリリースされた25曲入りのCD“NELLY Omay La Gardela”(8287 674195-2)は、その第1曲から第24曲までが1997年にBMGからリリースされた24曲入りのCD“NELLY OMAR Misterio... y cancion/La Voz Diferente”(74321 52541-2)と曲目も曲の配列も全く同一である。変わっているのはタイトルだけで、その意味ではまことに納得の行かぬ商品企画であると言わなければならない。しかしその第25曲目に収められている「ラ・デスカミサーダ (La descamisada)」が掘り出し物であって、私にとってこのCDの価値はこの1曲にあると言っても過言ではない。

デスカミサーダ、ダ (descamisado,a) という単語は辞書には「シャツなしの。みすぼらしい。貧乏人。」とあり、CDの紹介には「シャツをはだけた女」と訳されている。しかしアルゼンチンに限ればデスカミサーダとはペロニズムを象徴する言葉として受け止められるはずである。



1945年10月、アルゼンチンは政情不安で、ペロン派と反ペロン派が抗争を繰り返し、ブエノス・アイレスにはデモの群衆があふれた。そのデモの群衆を「シャツも着ずに (デスカミサーダ) 通りを歩く群れ」と嘲笑的に形容した新聞の見出しをエバは逆に利用して自らのスローガンとするようにペロンに進言した。それを受けてペロンはバルコニーから大群衆に向けて「わがデスカミサーダの一員として、わたしは諸君を心から抱きしめよう」と呼びかけ、大衆の指示を獲得し、政権奪取・権力掌握に成功した。ペロン政権はバラマキ政策でデスカミサーダ達を味方につけるとともに徹底的に彼らを利用することで権力を維持した[1]。その一方で資産階級、支配階級、上流階級の人々に対しては陰に陽に意地悪をしたから、それだけエバとペロンはそれらの人々から嫌われていたわけである。そんなペロニズムのプロパガンダそのもの言える曲を歌ったがためにネリー・オマールはペロン政権の御先棒担ぎと見られ、ペロン政権の崩壊と共に失脚の憂き目を見る。それ故にペロニズム賛歌とも言うべきこの曲には音楽的な中身よりも歴史的に貴重な1曲と言えよう。

2. 生い立ちから歌手になるまで(1911年-1924年)[2][3][4][5][7]

ネリー・オマール (Nelly Omar, 本名 Nilda Elvira Vattuone) は1911年9月10日の生まれで、現在94歳でお豊饒としている。彼女の生年については以前の資料 (“El Libro del Tango”, “Inventario del Tango”, “Anuario del Tango”など) では1913年となっているが、最近のインターネット関連の資料では1911年になっている。どうやら2歳ほどサバを読んでいたらしい。生家はブエノス・アイレスから南西に500km程の位置にあるグアミニ (Guamini) の”ラ・アトレビーダ(La Atrevida)”という農場 (注1)

にあった。グアミニは大農場や大牧場の中心地で、辺境の町という印象が強いが、周辺には湖沼も多く、現在ではフィッシングを中心としたリゾート・エリアとして有名らしい[6]。「ペヘレイ（魚名）の首都」という異名もあるという。しかしネリー・オマールが生まれた当時はどうであっただろうか。イタリア移民の父親のマルコス・バットゥオーネ（Marcos Vattuone）はその大農場の監督であったというから、暮らし向きにはかなり余裕があった方だろう。バットゥオーネ家は夫婦に加えて男の子5人、女の子5人の大家族であった。5人の女の子のうち、歌手になったのはネリー・オマールと姉妹のエレナとネリダである。

父親のマルコスはガルデルと親しく、ブエノス・アイレスに出かけた時はよく二人で競馬場に行ったという。家にはガルデルやその他の有名歌手のレコードが多くあったという。1918年のある時、マルコスは巡業に来たガルデルとラサノを自宅に招いた。イタリアの習慣として子供たちは大人に交じることを許されなかったので、ネリー・オマールは他の兄弟・姉妹と共に窓越しに覗いただけであったが、太って、頭髪を真ん中から分けたガルデルの風貌は強く記憶に残った。

ネリー・オマールは歌うことは好きだったが、それで稼ぐようなことを始めから考えていたわけではなかった。それどころか彼女は一度は飛行家を夢見たこともあったらしい。ある時、グアミニに飛行隊がやって来た。そこで彼女は初飛行を体験しようとしたが、父親に止められたので、希望は果たせなかった。それも当然だろう。単発・複葉・木製羽布張り・むき出しコックピットの時代の飛行機である。後に飛行学校（注2）に学ぶことを断念し、歌手として契約したときに、彼女の母親は「あなたは歌うために生まれてきたので、飛ぶためではないのよ」と言った[5]。ギターが上手かったという父親の血を引いて彼女は歌が上手く、幼少の頃から学園祭の主演として歌うことで評判が高かったという。

ネリー・オマールが実際に歌手を目指したのは父親が45歳の若さで心筋梗塞によって急死するという不幸に見舞われたのがきっかけである。経済的な苦境に陥った家族は1924年にブエノス・アイレスに出て来たが、法律上の失敗で財産も失ってしまった。そうした事情で彼女は自活のために歌手の道を歩むこととなった。

3. ブエノス・アイレスへの移住からペロン政権前夜まで（1924年—1945年）[2][3][4][5][7]

ネリー・オマールは学校で演技術、音楽、スペイン舞踊などを学ぼうとしたが、メンタルな問題で中絶してしまった。彼女はいつもはしゃいでいるような所があって、真面目にしていることができなかったらしい[5]。これが1924年以前のことか以後のことかはわからない。

彼女の歌手デビューは「アルゴス」という映画館（el cine Argos）においてである。それはフェデリコ・ラクロセ（Federico Lacroze）とコンデ（Conde）の二人がクラブの資金稼ぎに開催した音楽祭に隣人であった彼女を呼んだことによるのであるが、その成功を見て映画館主は直ちに彼女と契約した。その日はイグナシオ・コルシーニも出演しており、彼女の才能に感心したコルシーニは、また何時の日か共演する時のためにと彼のギターを差し出した。この映画館に彼女は数日間出演し、10ペソを稼いだ。これは1930年より前のことらしい。

1930年になってネリー・オマールはラディオで歌いたいと思い、母親の許しを得てラディオ・リバダビアのオーディションを受けることにした。当時、ラディオ・スプレンドィ、ラディオ・マージョ、ラディオ・リバダビア（全部、同じ建物にあった）の芸能部長で、斯界に影響力を持ち、チェロ奏者でも合ったミゲル・デレディケ（Miguel Deledicque）は彼女の歌を聴いて、音程を下げるように求めた。当

時はテノールやソプラノでタンゴやカンシオン・クリオージャを歌うのが一般的であったので、彼女もそのように歌ったのであろう。コントラルトに音程を下げた彼女の歌を聴いたデレディケはその場で彼女と契約し、早速その夜にラディオ・リバダビアでデビューすることとなった。またラディオ・スプレنديやラディオ・マージョのオーディションにも合格した。更に当時非常に重要視されていた、ドン・モンティエル（ホセ・ルイス・スイラス）（Don Montiel (Jose Luis Suilas)）が主宰するコンフント『セニース・デ・フォゴン(Cenizas del fogon)』のオーディションにも合格し、成功への道を歩むこととなった。

1933年までネリー・オマールは歌手兼声優としてこれらの放送局に出演し、またラディオ・スプレنديが「モヌメンタル」という映画館（el cine Monumental）から放送した特別番組でも歌った。また1932年と1933年には妹のネリダとのドゥオでラディオ出演した。曲目はカントリー・ソングからミロンガ、流行歌まで何でも歌ったが、タンゴだけはソロで歌った。ここで姉妹の間で名前を交換し、それまで本名のニルダを名乗っていたネリー・オマールが妹の名前のネリダを取ってネリーに、妹のネリダは姉のニルダを芸名にするというややこしいことが起きた。だから「ネリー・オマール」は正式にはこの時誕生したことになる。「オマール」の由来は明らかでない。その後、この姉妹ドゥオはフリオとアル

Nelly Omar con su hermana Nilda. canta en Radio Stentor, noviembre de 1935.



フレドのナバリーネ兄弟（Juio y Alfredo Navarrine）とアントニオ・モリーナ（Antonio Molina）が率いるコンフント『クアドロス・アルヘンティーナ（Cuadros Argentina）』に参加した。このコンフントはラディオ・ステントールで放送劇を上演した後、地方を巡業して回った。1935年にネリー・オマールはアントニオ・モリーナと結婚することになるが、この結婚は失敗で2ヵ月後には別れようと思った。しかし姑には愛着があったので結局この結婚は8年続いた[2]。

1935年にネリー・オマールはソリスタに



Nelly Omar se dedicó con igual intensidad al folklore y al tango. La dama del tango, sostenía que "había lugar para todas"...

戻り、同じ年に亡くなったガルデルへの敬愛と憧憬の印しとして彼のレパートリーを多く取り上げた。妹のニルダ（本名ネリダ）は他の妹のエレナ（芸名はゴリー・オマール）とデュオを組んだ。1937年にはカラス・イ・カレタス（Caras y Caretas）誌が主催した放送電話人気投票（Gran Plebiscito Radiotelefonico）でベスト女性歌手として認められたことで彼女の人気は一気に高まった。1938年にはバレンティン・アルシーナ（Valentin Alsina）地区の映画館「カルロス・ガルデル」に出演した。彼女の異名である「スカートをはいたガルデル」はこの時につけられた。

その後はラジオ・ベルグラノーと契約し、エンリカ・カディカモやオメロ・マンシが脚本を書き、リベルタ・ラマルケ、アグスティン・マガルディ、その他の有名アーティストが出演した数々の放送番組で彼らと共演した。1940年代にはラジオ・ベルグラノー、ラジオ・ステントール、ラジオ・スプレندي、ラジオ・エル・ムンドなどで活躍した。ラジオ・ベルグラノーに出演したある時、有名な俳優であったエンリケ・デ・ロサス（Enrique De Rosas）はネリー・オマールを評して「変わった声をしている（voz diferente）」と言ったという。また”Novelty”という名前の作詞・作曲家協会は1942年に彼女にメダルとともに「タンゴのドラマティックな声」という称号を献上した。またこの頃バイーア・ブランカ、メンドーサ、サン・フアン、トゥクマン、サンティアゴ・デル・エステロ、マル・デル・プラータ、ロサリオなど国内主要都市を歴訪している。

ネリー・オマールは1940年にカルロス・ビバンが主演する”Canto de amor”という映画に出演した。しかしこの映画は何故か劇場公開されなかったし、プリントも残されていない[16][4]。また”Melodias de America”という映画にも出演し「エル・アグアセーロ（El aguacero）」を歌った。これは映画のサウンドトラックに基づいたCD CDFOGMED 057に収められているというが筆者は未聴である。この映画は1942年に公開された。彼女の映画出演はこのB級映画2本だけである。但し、主演女優の吹き替え役として1951年の映画”Mi vida por la tuya”の中でディセポロ作のミロンガとタンゴを歌ったことはある。

3. ペロン政権時代(1945年—1955年)



1946～1947年にかけてネリー・オマールはフランシスコ・カナロのはからいで彼の楽団に参加する形でオデオン・レーベルに初録音（10曲）を果たし、更にR. グレラのギター伴奏でやはりオデオン・レーベルに16曲を録音した。しかし不思議なことに、これらの録音活動を除いてはこの時代(1945年—1955年)の彼女の活動に関して、ペロン政権との係わり合いに関する事柄の他には諸資料([3][4][5][7][8])に記述が殆どない。

ネリー・オマールとのインタビューに基づいて記述されると見られる資料[2]は彼女は人に頭を下げるのが嫌いであったと告白したことを紹介し、それに続いて次のような彼女自身の言葉を引用している：「私は扉を叩いて回るようなことは好まなかった。もし自分が人の好意を当てにして歌っているとわかったなら、全くみじめな気持ちになったろう。生涯に一度だけ私は人に助けられたことが

あり、それでラディオ・スプレンドィに出ることができた。その人とはエビータであるが、しかし私から彼女（＝エビータ）に頼んだわけではない。（中略）。私は彼女に感謝するためにミロンガ「ラ・デスカミサーダ」と行進曲「エス・エル・プエブロ（Es el pueblo）」を録音した」と。この2曲はRCAビクトル・レーベルの特別盤(particular)として録音された。

ペロン政権のその後の時代にネリー・オマールは政府が主催する大人民集会で何回も歌ったが、彼女自身は「政治に介入する気は全く無かった。ただ私はペロニスタで、ペロンとエビータが好きだから参加したのだ」と言っている[2]。それから50年後の2005年5月4日付けの別のインタビュー記事[5]でもネリー・オマールは、自分は民衆のアーティストであり、ペロンとエビータを信奉するペロニスタであるが、政治家になろうとは思ったことは無かったと言っている。

これらのことから推察するに、ネリー・オマールは政治的野心など全く無いままに純粋な気持ちでペロニスタを標榜していたと想像される。エバ・ペロンはデスカミサードを熱狂的に支持した反面、資産階級やエリート階級に対しては迫害・締め付けを行ったから、公然とエビータと対立したりベルタ・ラマルケは別格としても、エビータに対して面従腹背であったタンゴ関係者も多かったと想像され、それらの人々はエビータにとっては煙たい存在であったに違いない。それ故に、ネリー・オマールのような純真なペロニスタはエビータにとって有難い存在であり、彼女はそこを旨く利用されたと言うべきであろう。

4. 逆境を耐え抜いて獲得した新たな栄光（1955年－現在）[2][3][4]

1955年にペロン政権が倒れると、それまでペロン政権寄りだったアーティストはすべて仕事を失ったが、中でもネリー・オマールは殆ど蟄居閉門の状態になった（実際には家まで壊されたらしい）。それでも1957年には、生きていることを示すために、アベニダ・デ・マージョ85にある「ラ・ケレンシア（La Querencia）」に1ヶ月間出演した。



その後、モンテビデオのラディオやテレビに出演し、1958年にはベネスエラに行き、レストランやテレビ・カラカスの有名番組であった”Show de Renny”に出演しながら1年間を過ごした。1960年にはブエノス・アイレス州を巡業して回ったが、もはや人々に受け入れられず、すべての門が閉じられたことを知って彼女は引退を決意した。

しかし彼女は蘇った。1966年にアルゼンチンのテレビに姿を現し、「カーニョ・カトルセ（Carnó 14）」に出演した。1969年に作詞家でマヘンタ・レーベルの芸能部長でもあったレイナルド・ジソ（Reinaldo Yiso）が彼女にレコード録音に戻ることを求めた。彼女は一度は断ったが、これはコレクションニスタ向けだからとジソに説き伏せられ、結局、R. グレラの伴奏で録音することになった。1972年にはギター奏者で作曲家のホセ・カネー（Jose Canet）の説得で、彼女は再び人々の前で歌い、テレビにも出演するようになった。こうして彼女は復活した。その後、彼女は本稿に付けたディスコグラフィからもわかるように多くの録音を行い、年齢による衰えなど全く感じさせない歌唱で大歌手としての資質を改めて実証することとなった。

2000年2月18日と19日には、すでに90歳近い年齢であったにもかかわらず、コルドバ市のリアル

劇場に出演し 18 曲を歌い、大喝采を浴びた[9]。また同年 11 月 2 日から 12 日までドイツのシュットガルトで開かれたタンゴ・ビエンナーレ 2000 にも出演し、賞賛された[10]。それどころか 2005 年の 5 月 20 日には 93 歳でブエノス・アイレスのルナ・パーク・スタジアムに姿を現し、「パレセ・メンティエラ」、「ノブレサ・デ・アラバル」、「マノ・ブランカ」、その他多くのタンゴやミロンガを歌った[11]。また彼女はインタビューアの質問に答えて、最新の録音はグスタボ・サントアララ (Gustavo Santoalalla) が製作した CD 中の「ラ・クリオージャ (La Criolla)」であると言っている[5]。(この CD が実際にリリースされたのは 2007 年である (“Nelly Omar LA CRIOLLA”, SURCO / SEMINAL / UNIVERSAL 1749925)。) 93 歳で新録音を果たすとこと自体が驚嘆に値するが、更にインタビューアに対して、自分はまだ現役だと言っていることも驚きである。ネリー・オマールの場合は普通のサラリーマンなら「余生フェーズ」に入る 60 歳前後を振り返り点として人生を 2 倍に生き抜くことで大ブレイクした言うことができる。真にもって高齢者の鑑とすべきである。



5. ネリー・オマールの歌唱スタイルと録音活動

ネストル・ピンソンはネリー・オマールについて「そのディクシオン、フレージング、技術的完璧性、味わいの良さ、など彼女の歌唱能力は歌手の見本であり、パラダイムである」と高い評価を与えている[2]。これらの評言はそのままメルセデス・シモーネにも当てはまるが、そのシモーネもネリー・オマールを「すべてを持っている」と賞賛している[12]。

ネリー・オマールは若い時にはラマルケをお手本とし、キログの真似をしようとしたこともあると語っている (ビデオ「タンゴ史の真実」 LAV-2001) が、実際には彼女の歌唱スタイルはラマルケやキログとは全く異なり、ネストル・ピンソンの評言をそのまま受け入れるならばむしろシモーネに近い。しかしシモーネの優美な雰囲気は残念ながらネリー・オマールでは希薄である。その代わりに、大げさな感情表現を排し、曲に溺れこむことなく、曲を一つの対象としてとらえ、それをそのまま聴く者に伝えようとする姿勢が感じられる。それでいて決して押し付けがましくはない。このような歌唱スタイル (芸風と言った方が適切かもしれない) はやはり彼女独自のものであり、それは数十年にわたる活躍期間を通して、基本的に変わっておらず、そこが彼女の歌手たる所以である。それでも前後 2 回の活動時期を比べれば歌唱スタイルにはやはり違いがあり、ペロン政権時代に重なる前期ではまだ 30 歳台なので潑刺とした元気の良い歌い振りで、良い意味で「体育会系的」であるが、歌唱スタイルとしては未確立である。上に述べたような歌唱スタイルが確立されるのは 60 年台末以降の後期に入ってからで、年齢のためであろうが、落ち着いた雰囲気の意味深い歌い方になっている。勿論、これは私だけの感想である。

本稿に添付したネリー・オマールのディスコグラフィは資料[4]と[15]を基に松本 保氏と石川浩司氏の綿密な調査結果を補って作成したものである。まだ現役の彼女であるからディスコグラフィといっても当然、完成品ではあり得ない。140 曲という録音数はラマルケの～450 曲、シモーネの～250 曲に比べれば少ないが、その 80%に当たる 112 曲が 58 歳以降に録音されている点ではラマルケを凌いでおり、更にその大部分が 1969 年から 1983 年の間に集中している。前期については、F. カナロと共演した 10 曲では有名曲が並んでいるが、1950～1955 年の録音では 16 曲の中でタンゴは 1 曲のみで、他はバルス、

ミロンガ、カンシオン、エスティロなどである。これは本人の嗜好ではなく会社の方針でそうなったそうである[3]。一方、後期については古典的、準古典的有名曲と彼女独自のレパートリーとが混在している。

ネリー・オマールの全曲を聴いたわけではないが、興味深いことに彼女の場合は「これはネリー・オマールの歌で聴くに限る」という曲目を選び出すのが難しく、その反対に「これは他の歌手の方が良い」というのも先ず見当たらない。要するにすべての曲について常に高いパフォーマンス・レベルが実現されている。それで本稿では、あくまで私個人のフィーリングに基づいて恣意的に選曲したいくつかの歌唱について誌上鑑賞を試みた。

① コルネティン (Cornetin) (Odeon 41003A 1950/7/28 : EMI 4195(LP), ALTAYA TA 060(CD), el bandoneon EBCD 113(CD))

R. グレラのギター伴奏による 16 曲の Odeon 録音はタンゴはこの曲だけで、あとはバルス、ミロンガ、カンシオンなどである。ネリー・オマールの若い時の澁刺とした歌い振りが良く出た名唱である。

② ラ・デスカミサーダ (La descamisada) (SONY&BMG 644195-2(CD))

冒頭に述べたように、ネリー・オマール失脚の主因となった曲である。[14]に挙げたサイトで歌詞を閲覧することができるが、真に露骨なペロニズム賛歌、エビータとペロンへの追従に溢れた、政治的プロパガンダの見本のような内容である。こんな歌を歌えばペロン政権のお先棒担ぎと見られても言い訳はできないだろう。こんな録音を彼女の代表的歌唱に挙げるのはいかがなものかと言われそうだが、歌唱そのものは立派な出来であることと、歴史的な意味を考えてここに掲げた。

③ ムチャーチョ (Muchacho) (MAGENTA 5035(LP), MAGENTA 88008(CD))

④ ミロンガ・トリステ (Milonga triste) (MAGENTA 5035(LP), MAGENTA 88008(CD))

③、④共に 1969 年の復帰第 1 号の LP に収められている。この 2 曲はシモーネの名唱で知られているが、それに勝るとも劣らぬ名唱である。まだ若々しい（と言っても 57~58 歳のはずだが）、張りのあるネリー・オマールの歌声が楽しめる。

⑤ デスデ・エル・アルマ (Desde el alma) (Embassy 90.007)

ネリー・オマールはこの曲を 1947 年に F. カナロの伴奏でも歌っているが、やはり曲の味わいとしては後期の録音の方が良い。この曲の代表的名唱と言ってよいだろう。歌詞は擬人化した魂に呼びかけるような内容[13]で、後期の彼女にはこのような歌が良く合うようだ。

⑥ マノ・ブランカ (Mano blanca) (Embassy 90.007)

荷車を牽いて駆け抜ける白馬[14]に呼びかけるように歌う、ネリー・オマールの飾らない、淡々とした歌い振りがかえって説得力をもって語りかけてくる。

⑦-1 エル・アフリカーノ (El africano) (MAGENTA 88.066(CD))

⑦-2 ラ・ギターリタ (La guitarrita) (RCA AVSP 4734(LP), BMG 52541-2(CD), SONY&BMG 644195-2(CD))

⑦-3 デレーチョ・ビエホ (Derecho viejo) (RCA AVSP 4734(LP), BMG 52541-2(CD), SONY&BMG 644195-2(CD))

⑦-4 コム・イル・フォー (Comme il faut) (MAGENTA 512.510(CD))

4 曲とも硬派の古典曲で通常は器楽曲として演奏されるが、ネリー・オ



マールはそれを敢えて歌の曲として取り上げている。作詞者は⑦-1はフランシスコ・リオ (Rfancisco Lio)、⑦-2～⑦-4はガブリエル・クラウシ (「ラ・ギターータ」にはパスクアル・コントゥルシ、「デレーチョ・ビエホ」にはE. バルデサリによる別の歌詞がある) [14]である。どの曲も随分と歌い難いように思われるが、聴いていてそういう感じは無い。彼女はこのような硬派の曲が好きなのだろうか。

⑧ アマール・イ・カジャール (Amar y callar) (Embassy 90.010(LP), MAGENTA 88006(CD))

ネリー・オマール作詞、J. カネー作曲による彼女の代表作である[14]。ビデオ「タンゴ史の真実」の中でもこれが歌われている。感情を抑えた後期の歌い方の特徴が良く出た名唱である。

⑨ ビエホ・ハルディン (Viejo jardin) (SURCO 9824898-SET 9881787(CD))

目下のところ彼女の最新録音であるので取り上げた。92～93歳頃の録音であるから、さすがに声自体には年齢を感じさせるが、歌い方は依然しっかりとしている。全く大したものである。若手の歌手達に「孫たち、負けるな！」と叫びたくなる。

6. 作詞・作曲家としてのネリー・オマール

ネリー・オマールは作詞・作曲家としての才能にも恵まれ、以下に示すような多くの作品がある。バルスの作品が多く、またJ. カネーとの合作によるものが多い[4]。:

バルス: ソロ・パラ・ティ (Solo para ti) (ギター奏者のフランチャーニとの合作)

ア・グアミニ (A Guamini)

ミステリオ・イ・カンシオン (Misterio y cancion) (J. カネーとの合作)

ラス・クアトロ・レスプエスタス (Las cuatro respuestas) (〃)

カジェシータ・ミア (Callecita mia) (〃)

ディア・デ・ラ・ベルダ (Dia de la verdad) (〃)

ラティード・トラス・ラティード (Latido tras latido) (〃)

カンシオン: ブエナ (Buena) (〃)

カテドラル・アル・スール (Catedral al sur) (〃)

ボレロ: モントンシートス・デ・アレーナ (Montoncitos de arena)

ミロンガ: パ・ドゥメスニル (Pa'Dumesnil) (A. クフレとの合作)

コモ・エル・クラベル・イ・ロサ (Como el clavel y rosa) (J. カネーとの合作)

タンゴ: イントゥリガ・イ・パシオン (Intriga y pasion) (〃)

(資料[4]ではバルスとされているが、実際に聴いてみるとタンゴである)

カウサリダ・イ・アモール (Causalidad y amor) (〃)

アマール・イ・カジャール (Amar y callar) (〃)

タンゴ以外にバルスなどが多いのは彼女の嗜好の反映であろうか。

本稿をまとめるにあたり貴重な資料を多数ご提供いただいた松本 保氏に深甚の謝意を表します。

(注1) estancia、辞書には農場とも牧場ともあり、どちらとも決められないが、多分大農場兼大牧場であったのだろう。

(注2) Palomar、普通名詞としての palomar は「鳩舎」とか「雑居住宅」を意味するが、この場合は

頭文字を大文字にして固有名詞のように記述されているので、前後の関係から勝手に飛行学校のことでないかと推測した。「鳩舎」ということから「郵便飛行士」を意味するのかも知れない。

参考資料

- [1] ジョン・バーンズ (牛島信明 訳)、「エバ・ペロン 美しき野心」、(1982年 新潮社) pp.57-78
- [2] Nestor Pinson, <http://www.todotango.com/spanish/creadores/nomar.asp>
- [3] Estela dos Santos, “LA HISTORIA DEL TANGO 14 Las cantantes”, (Corregidor 1994) pp.2304-2309
- [4] Oscar Del Priore, Tango XXI, Mayo 1994, pp.4-7
- [5] Mauro Apicella, <http://weblog.maimonides.edu/gerontologia/archives/001352.html>
- [6] <http://www.turismobarato.com.ar/provincias/municipios/guamini.htm>
- [7] Liliana Samuel, <http://www.eldiariony.co./noticias/especiales/detail.aspx?EspecialId=35&id=1173027>
- [8] <http://www.elportaldeltango.com/especial/NOmaryD.htm>
- [9] Tango XXI, Junio 2000, pp.20-21
- [10] Tango XXI, Febrero 2001, p.21
- [11] <http://portpravda.ru/sociedade/cultura/7913-0> (余談であるがこれはロシアのサイトで、サイト名は何と pravda=プラウダである。スターリンがこれを見たら何と言うであろうか?)
- [12] Coleccion “Los Grandes del Tango” MERCEDES SIMONE, Año 1, Numero 16, Febrero 1991, p.17
- [13] <http://www.planet-tango.com/lyrics/> 参照
- [14] <http://argentina.informatik.uni-muenchen.de/tangos/> 参照
- [15] http://www.todotango.com/spanish/biblioteca/discografias/grabaciones_autor.asp?id=295&...
- [16] <http://www.cinenacional.com/personas/index.php?persona=7069>

写真説明

- (1) nellyomar1 出典 : <http://www.lportaldeltango.com/especial/NOmaryD.htm>
- (2) nelly_orquesta 出典 : [2]
- (3) nelly_omar con su hermana nilda 出典 : "El Libro del Tango"
- (4) nellyomar5 出典 : [12]
- (5) nellyomar3 出典 : [3]
- (6) nelly_omar-thumb 出典 : [5]
- (7) nelly_omar-cine 出典 : [16]